

『家政学の間違い』の書評に込めて

丸 島 令 子

はじめに

志水先生、誠にありがとうございました。この書評を先生にお願いしたい「家政学は畑違い」と苦渋に満ちた表情で断られたときのことが目に浮かびます。それにもかかわらず強引に食いさがったご無礼をお許しください。

今日、本学の家政学部もその一つとして、学部の変革のきざしがうかがわれ、その学問の再検討が活発に行なわれつつあります。こうした中で出現したこの書物を無視できないと感じられ、むしろ「畑違い」の学者に書評をお願いし、新鮮な視野を得させて頂きたいと切望いたしました。このような私方の勝手な意図で恐縮でしたが、その期待は裏切られませんでした。

本文で、なぜ「畑違い」の先生にお願いしたかという理由をもう少し詳しく述べるとともに、本書をとおして表明されています先生の家政学についての見解と関連して、私の独断と偏見を少し述べさせて頂きたいと思います。

「畑の中」の悩み

家政学は“悲劇の学問”という表現を、過去、真剣に家政学の体系化について取り組み、考察されてきたいく人かの研究者によって言われたことがあります。例えば、「生活学会」の創設に力のあった川添登氏は、次のようにその悲劇性を説明しておられます。少し長いですが、引用します。

「もともと将来の家庭婦人を対象とする学問として成立した家政学は、戦後、

大きく変貌した。それは食物学科を出た学生が食品産業に就職するといったように、被服学科から被服産業、住居学科から住宅産業等々と、大学の家政学部は、その卒業生を社会、主として生活関連産業へと送り出す母胎となったからである。このこと自体は良いことであつたし、女性を主たる対象とする学部としては、必然の道筋であつたであろう。そして、そのため家政学は、生活関連産業の基礎科学への方向へと進むことになつたと思われる……このような科学は、今後さまざまな生活財を、より優れたものへとするためばかりでなく、生活者の側に立って製品の品質や機能をチェックするためにも必要な科学であることに疑いはない。しかしそれを家政学がなさねばならなかつたということは、ひとつの悲劇であつた。すなわち、元来、生活者の学問であるべきはずの家政学を、生産者の学問へと転換し、先にみたように、研究の主流を、より基礎科学的なものへと進ませ、家政学解体の危機をつくりだしたからである。」

以上のように、川添氏は、家政学の悲劇性は、こうした時代の状況の中で、過去、強いては既存の学問体系の中に家政学をあてはめようとしたところに起こつたと考察されています。そして、氏は、それ故に「家政学が真に独立した科学になるためには、その本来の姿である生活者の学問として、産業社会が生みだした既存の学問すべてにたいして存在する、もう一つの学問世界をつくりだすのが家政学である」と主張されています。「それは生産に対しては生活を、官に対しては民を、公に対しては私を、体系に対しては非体系を、理論に対しては反理論を、分析に対しては総合を、闘争に対しては調和を……等々を主張するものであらう」とも述べられ、示唆的です。

わが国の家政学も1949年の学会創設のときに“家庭を中心とした人間生活のため”という学問の目的がありました。しかし前述の産業社会の発展の中で、家政学原論研究者がそれをいくら声を張り上げてもかき消される方向に、あれよあれよという間に向かつて行つたように思います（その力の至らなかつたことは責めを負うべきですが）。そして現状の学問の目的のずれを問うよりも、

しっかりと体系づけられていると信じられる他の「畑」ばかりを意識し、ときには自らの「畑」を貸したり、利用したりされることを許してしまうような残念な面がみられたように思います。

もともと“家庭を中心とした人間生活のため”には、多くの「畑」からの参加者が必要でした。しかし、その「畑」から本来創りだすべきものがぼんやりしてくると、その「畑」の中にいる者は、そもそもどういう「畑」かも‘知らない’‘わからない’ですましているか、自らのアイデンティティに悩み続けるか、いずれにしる精神状態はよくありません。私も含めて同じ「畑」の中の人間は、「家政学の間違い」に直面視することは、自己矛盾を書きつらねることになりかねません。このような「畑」の悩みを持つ者にとって、「畑違い」から、ごく近年、「この畑」に入ってきてくださった志水先生の見解は、得難いインパクトをもたらして頂けると思ったのです。

『家政学の間違い』の間違い

たいへん無理なお願いをお引き受けくださった先生ですが、さすがご自分の「畑」における一大家であるだけに、『家政学の間違い』の見識の狭さ、不十分さをずばりと指摘してくださいました。

本書は、アメリカにおける家政学について、家政学者ではない女性記者が、百年前のアメリカ家政学の初期のパイオニアたちが、料理を科学化することによって家政学を成立させる原動力としたという見解を中心に、人間味の乏しい（味気のない）今日のアメリカ料理をもたらした家政学批判がなされているものであります。そのことは先生もお見とおして、本書が「家政学の間違い」＝「調理学の間違い」であるとしている論旨を指摘され、先生は「材料の特性を知り、調理法の原理を学んで、どうして料理が味気なくなるのか。そういうことは考えられないのではないかと」「食生活論」や「食品化学」などを講義されている慧眼をもって反論されています。こうした指摘はまた調理学を知る人の言葉であると思いました。そしてさらに、（『家政学の間違い』の）著者の言う

ように、「味気ない料理は、調理学が家庭に普及したためではなく、むしろ逆に、調理学の成果が家庭に活かされなくなったためではないか」と考察されています。これは「畑違い」の人であるからこそ見えることではないかと思いました。

本書はまた、アメリカの味気ない料理が、家政学の科学化によるものだと主張するとともに、それは、家政学と食品産業の結託によって強化されたと論述しています。この点に関して先生は、「主婦（夫）の家庭離脱が先にある」、「それに迎合しての商品開発なのだから、調理学者に責めを押しつけるのは酷な話」と、問題の基本にふれてきておられます。過去の家政学、今日の家政学の両方にとって、問題はここにあると思われれます。

さらに本書は、アメリカ家政学の初期のパイオニアたちが、料理の科学化をはかるために、結局は女性たちを信用せず、男性たちの既存の専門領域からもっともらしい科目をいろいろ取り入れてホーム・エコノミックスという奇妙な学問にしてしまったという一つの結論を導いています。例えば、本書に「なぜ家政学者は決定的に落ちぶれて力を失ったのか？それは彼女たちが女性を信じていけなかったからだ。あれだけあくなき研究をしても、女の仕事から女を切り離すことはほとんど思いつきもしなかった。彼女たちにとって料理と家事は、子どもを産むことと同じようにはっきりと性に結びついた仕事だった。彼女たちはこの関係に満足していた」という見解が表明されています。科学や学問に女性も男性もありませんが、女性が多くかかわる領域だけに、家政学は今も昔も、性が云々されてきたのは確かです。しかしこう言いきってしまえるかは問題のあるところだと思います。そして本書は、この結論以上に、新しい家政学の展望を提示しているわけでもありませんので、先生も理解されましたように家政学の学問的性格などを議論する類のものではないようです。

本書の著者の論理によりますと、初期のパイオニアたち（女性）が料理を中心とした家事の原理を、既成科学の男性に導かれて女性のみにも習得させる組織を創って普及させることに固執したにもかかわらず、たとえそこに食品産業と

の結託があっても、まったく料理がまズくなってしまうというのは、先生の言われるとおりにおかしな話であります。これは料理の科学化をとりやめれば解決するとは誰も思わないでしょう。先生はむしろ初期のパイオニアたちが蔵していた料理など家政学への「理念はすっかり薄められてしまった。‘これが女性を信用しなかった’ という意味であり、家政学失墜の原因ではなかったか」と究明されています。この指摘こそ意義があると思います。

アメリカ家政学のパイオニアたちの理念

先生はパイオニアの一人のキャサリン・ビーチャーの「女性の役割」についての使命感に、ご自分のお母さまのイメージを重ね合わせて「ちょっとした衝撃であった」と述べられています。こうした指導者は、当時の女性たちを無知から開放し、女性が家庭や社会により貢献することを願って女子教育を推進していった面は強かったと考えられます。私は、もう何十年も前に、アメリカの大学院コースの一つの「Philosophy of Home Economics」を履修しましたが、こうしたパイオニアたちの理念を教官、学生とともに論じあったものです。しかし、現代の若い女性記者には、これらのパイオニアたちが、女性、料理、家事を劣しめた張本人に映るのでしょうか。時の流れとは恐いものです。

そうした張本人の一人で、本書の随所にふれられているエレン・スワロー・リチャーズも、百年前家政学を組織するのに力のあったアメリカ最初の自然科学者で、最初の女性の MIT 学士号取得者でした。彼女は、家族と自然環境、社会組織との正しい調和を見だし、生きることを教える、「正しい生活環境創出の科学」という「優境学 (Euthenics)」を主唱し、形成しようとしていました。彼女が活動していた時代のアメリカは、大量生産—大量消費の体制が成立しつつあった時期で、汚染、生命の危機、不良品と消費者の無知など、まこと現代の日本の社会や自然環境に似ていたようです。

以上のような状況の行きつく先のエントロピーを、エレン・スワロー・リチャーズはいち早く察知して、多くの関連諸科学を組織しようとしたのです。

しかしながら、当時の科学者は、彼女が既存の科学体系から足を踏みはずし、「優境学」はまったくのごたまぜ的なものと受け取ったのは当然の成り行きでした。アメリカ家政学創設に大きな影響を与えた彼女の理念と学問は、十分認識されず、結局は、家政学も科学の細分化と、産業・生産者側への傾倒の方向に進んでいったのです。したがって、今日のアメリカ家政学者の中には、学問の混沌を招いた要因を彼女にまでたぐっていく人もいます。

しかし、1960年代にアメリカ家政学会は、リチャーズが生体（人間・家族）と環境との関係・相互作用に注目した、彼女のエコロジカルな原理による学問の組織化を見直し、再編成に取りかかり、今も絶えざる努力がなされています。そして、リチャーズの理念や学問を再認識したのは家政学者のみではなく、経済学の一部の研究者によっても関心が示されています。数年前、ロバート・クラークという環境科学者が、エコロジーの創始者としてのエレン・スワロー・リチャーズの生涯を執筆し、わが国では新進の経済学者、工藤秀明氏によって『エコロジーへのはるかな旅』という翻訳書として発表されました。工藤氏は、そのあとがきに「自然環境と共生しうる生活・経済社会の形成をめざして、民衆の生活の場から諸学を統合していく主体的科学にして社会的運動であるエコロジー。これはエレン・スワローが創設し、彼女の研究と行動に起源を有するものである」と記して、書物の副題に「学際科学の創始者エレン・スワロー」と冠されています。本文のはじめに紹介した川添氏の意見と照らし合わせると感慨深いものが感じられます。

わが国の家政学とその将来

先生は「畑違い」ながら、家政学の「畑」の現状をご自分で調べられ、的を得た意見を表明くださいました。さすがと思い敬服いたします。

わが国の新制大学に家政学部が設置されたのは、当時の占領国アメリカの影響が大きく、ちょうど前述しましたようにアメリカ家政学の細分化、専門化の最高頂にあったときにあたります。したがって先生が調べられましたように、

わが国の家政学は、各部門の研究がお互いばらばらなままなされるのを常としてきて、学問の方法論との関連性にあまり神経質であったとは言えません。それに巨大科学になってしまい、ますますその焦点がぼやけています。

応用科学、学際科学は問題中心アプローチというか、目的が明確であることが要件と、先生も指摘されていますが、現在それがうまく機能していないことが多いようです。例えば中・小学校の「家庭科教員」の養成は、現在の一つの家政学の具体的目標ですが、近年、実習生が実習先で技術を拒否する場合がありますと知って、私は驚愕いたしました。実際、先生の指摘されますように「何が出来る学生を世に送り出すのか」ということもうまく機能しがたくなっていることも否めません。

以上のような状況では、その学問、教育の再編成が急がれます。私もこれについて独断と偏見を述べて、ささやかな意見の表明に代えさせて頂きたいと思えます。

私は「人間科学」の立場をとりたいと思います。つまり、もともと家政学は人間科学であると考えていました。私はエレン・スワロー・リチャーズが、ホーム—生活主体から、まわりの社会・経済的環境、自然環境、科学技術的環境との関連性、相互作用をとらえ、全体の調和を創出させる科学を想定したことに影響されています。その場合、人間、環境、人間行動（相互作用）の三つ巴の構成から統合が目ざされると思われれます。そして、人間は「家族」または、生活主体を明確に組織としてとらえられることが課題になると思われれます。リチャーズはこの家族、生活主体を明確にしませんでした。そのため人間と環境との動的な把握の説明が不十分でした。人間科学の発想も油断すると、また、かつての家政学のように理系、文系などの科学のせめぎ合いになるかもしれません。

先生の持論としての家政学の原点にもどり、「家事科学」に再編成するというお考えについて、これは公民教育の基本的な学問を想定されているように思えます。しかし今日、大学の教育、研究の目的に専門職業としての主婦の養成を

『家政学の間違い』の書評に就いて

かかげて、学生にアピールするでしょうか。現在、家事ばかりでなく、「母性」さえも教育されなければならないと主張されたりして、現代社会にもっとも必要な教育の一つは本当は家政学かもしれません。しかし家政学は専門的知識をもつ女性を養成してきて、家庭不在の主婦を産出するのに加担して衰退してしまったのかもしれません。この点こそ今日の家政学の問題であると言えます。「家事は研究に値するし、真に学ぶ価値がある」と言われていることは賛同できます。そうした家事科学は今や男女を問わず、むしろすべての人が学ぶためのものと考え、その教育者、指導者の養成が必要で、教育大学で、より専門的な「家事科学学科」の編成が考えられないでしょうか。考えてみれば、人間科学もそういった性質を有しているのでしょう。ただそこでは、視野を個人から家族、共同社会、地球全体にまで広げて考え、問題解決のできる能力を養うことに力が注がれることになるのでしょうか。

おわりに

『家政学の間違い』という書評のために、アメリカの家政学、日本の家政学、家政学の将来の方向や展望と、思いがけなく多岐にわたる話題になってしまいました。私自身、矛盾にみちた見解を露呈するばかりで、それに志水先生を引きずり込んでしまい、心からお詫びいたします。

文献：

川添登「家政学と生活学」『生活学』第四冊，ドメス出版，1978，p. 290。（“悲劇の学問”についての他書：

青木茂『新・家政学論』中教出版，1970，p. 3.

今井光映「最近の欧米の家政学の動向」日本生活学会編『生活学』第五冊，ドメス出版，1979，p. 219.）

クラーク・R.、『エコロジーへのはるかな旅』（工藤秀明訳）ダイヤモンド社，1986.

丸島令子「アメリカの家政学教育（第二章）」『家政学教育の発展』ミネルヴァ書房，1972.

松下英夫『ホーム・エコノミックス思想の生成と発展』同文書院，1976.